

あとがき

もう梅雨の季節に入りました。日本の各地では、目下田植機が田のな
かを動きまわっていたり、すでに田植が終って青田が広がっていたりな
ど、さまざまと存じます。本年度の大会まで後四ヶ月ほどとなりまし
た。九州大学の方では、会場の設営や大会運営などで、いろいろとお骨
折を頂いており、着々と準備がすすめられているようです。事務局とい
たしましても、大会の報告者の決定やスケジュールなどの運営について、
七月中に合同委員会を開いてプランをつくって頂かなければなりません。
お手にとられておわかりのように、今回の通信はかなり分厚いものに
なっていました。印刷費や送料の経費が多くなることになってし

まいりましたが、九州地区と東北地区の研究会の報告と討論を生に近い形でせることによって、会員の皆さんに研究会の熱気が伝わり、それが大会に反映されて活発な討論が行なわれることを期待しました。

本年度のテーマである「村落生活の変化と現状——その主体的再編成をめぐって——」の分析方向や内実的把握に関しては、必ずしも九州地区の方と東北地区の方では共通していません。それだけに、今後予定されている東京での研究会における問題の総括や大会の討論は、活気を呈するのではないかと思っています。

東北地区の研究会で問題になっていました点から一つ二つとりあげてみますと、一つは「主体的再編成とは何か」ということが挙げられます。これは、合同委員会でメンテーマは昨年度の継続で本年度はさらに問題の焦点を明確にするために決定したサブテーマであるわけですが、確かに、この「主体的再編成」をもう少し検討してみる必要はあるかと思われまます。これが出てきた経緯のなかには、農村自治の問題があったわけですが、「主体的再編成」といった場合に、必ずしもそれは農村自治という形でとらえられているわけではないように思われます。すなわち、まず「主体的」そのもののとらえ方がかなり問題となるのではないのでしょうか。それは、単に農民が自発的に行動することだけを意味内容とするのか、あるいは、一定の歴史的社会的認識のもとに展望をもって「主体性」を形成しつつ行動するということを内実としているのか、ということが検討される必要があるのではないのでしょうか。

いま一つは「共同体」の問題があらためて提出されましたが、これまですでに指摘されていますように、それは、理論的な決着がつかないまま現在まで推移しているわけです。もちろん、一つの決着・結論が出るというわけのものではありませんし、また他方では、現段階では、問題としてとりくむ必要もないという考え方もないわけではありません。

それでもなかには、何でもかんでも共同体のなかにさらえこんでとらえようという考え方があり、また、解体しつつある「ムラ」の再建の方向を、共同体的な性格をもつ伝統的村落への回帰に求める発想もあるわけです。しかし、いずれにしても、共同体の問題をウヤムヤにしたままで「ムラ」の解体ないし再建（本年度のサブテーマに即していえば再編成ですが）が論じられるということには、問題があるのではないのでしょうか。

こうした点を考えると、「再編成」ということの方向と内実が問題となってくるわけですが、それもかなりの論議を呼ぶことになると思われまます。そうした意味で、本年度の大会は、まことに波乱を呼ぶ要因もっているわけで、それだけに多くの会員の参加が望まれます。というのは、討論のための討論、研究のための研究、研究者の自己満足ということであってはならないのであって、大会の研究成果がどのような形で農民に反映されていくのか、という実践的課題を常に前提としておかなければならないのではないのでしょうか。

(山本 英治)